

佐賀新聞 2010(平成22)年11月6日(土) 県内文化欄 寄稿

5 さが文化 2010年(平成22年)11月6日(土曜日)

県内文化

寄稿 県立博物館・美術館学芸員 宮原 香苗

佐賀で「緞通」というとそれは敷物のこと、中国の「毯子(タンツォー)」に由来した呼び方です。

この展覧会の見所は、わが鍋島緞通の先輩格、清朝時代の「毯(絨毯)」16点が、故宮博物院所蔵の作品から選ばれて日本初公開されたこと。ちなみに所蔵する博物院でも、保存に神経を使う染織資料は一堂に展示することがなく、開場式に来日された副院長李季氏すら「初めて見ます」と言われるほど、所蔵数膨大、保管の蔵も多数ある故宮博物院ならではの逸話です。

開楯初日、多彩、精緻、豪華な文様の数々に圧倒されながら、清朝の皇帝の愛でたものだから当然だろうなど、学芸員の資料チェックの様子を見ていたのです

中国故宮博物院の緞通と日本の緞通展

が、羊毛や絹の鮮烈な色彩の裏には、経糸・緯糸に絡



宮原 香苗さん

豪華な文様と雅趣競演

めた文様の色糸が表れ、「鍋島緞通と同じだ」と改めて感動することしきり。

一級文物(日本の国宝級)

はいずれも新疆(ウイグル)産、文様の背景になる地の部分が金銀線で織られた赤の印象的な絨毯2枚、17、18世紀に作られたのがにわかには信じ難いほど色鮮やかな黄色の絹製絨毯1枚です。砂漠の民には果実「サクロ」や花がいかにも価値あ

中国故宮博物院が所蔵する国宝の緞通などが展示された中国故宮博物院の緞通と日本の緞通展「佐賀市の県立美術館



る文様であったか、献上された絨毯から想像してみてください。

17世紀中葉と最も古く、最大の絨毯は寧夏製。図録記載の大きさは4・0m×6・0mですが、広げてみたら5・0mありました。

四方に配された龍は火炎宝珠と戯れ、吉祥の瑞雲と六宝(犀角、卷子、珊瑚など)を織り出した見事なつくりです。

「中国故宮博物院の緞通と日本の緞通展」(鍋島緞通吉島家、佐賀新聞社など主催)は県立美術館で28日まで(月曜休館)。観覧料は大人千円、大学生800円。高校生以下無料。

運の花「枝蓮」、茎を連ねた蓮の花なのだとぞつぞつ。「蟹牡丹文は牡丹文ではない」のです。ただ、日本では家紋の「牡丹紋」を富貴花と尊ぶことから、藩御用の花毛氈に積極的に取り入れたのでしよう。

16枚の敷物は、すべて皇帝の身辺で実際に使われ、広大な宮廷の磚(せん)焼成煉瓦)を敷き詰めた床にじかに敷いたといえます。ただ現在

はまだ勉強不足を実感したことがあります。鍋島緞通の蟹牡丹文は中国の国花「牡丹」をモチーフに考案されたものと説明してきたのですが、私たちが唐花文と呼ぶ文様の起源は、仏教の極楽浄土に咲くよう。

後には、慣れ親しんだ日本の緞通の雅趣を、緞通織りの機音とともに楽しませよう。